『巴里籠城日誌』校訂現代語訳　(6)

松　井　道　昭・横　堀　惠　一

『巴里籠城日誌』旧名「法普戦争誌略」

渡正元　著

巻の6

西暦1871年1月15日（和暦明治3庚午年11月25日）。

1月15日[1]（パリ籠城、今日、既に120日である。）

昨14日付戦況報告[2]による。敵軍のパリ市街への砲撃が昨日中、モンジュ通、サンシュルピス、ヴァレンヌ等の諸地区に拡大した（大変激烈だったようだ）。南部と前衛の要塞への攻撃が大いに緩んだ、等。

パリ駐在の外交団員（欧州と米州各国諸全権公使・代理公使13名と領事官6名）から、ビスマルク北独同盟首相に以下の1月13日付文書[3]を送った。

伯爵殿

過去数日以来、包囲軍が占領した場所からの大多数の砲弾がパリ市内部にまで入り込む。婦女子、児童や病人の者達に当たる。被害者の中、多数が中立国に属する。パリにある全ての国の国民の生命と財産が継続的に危険に晒されている。

以下に署名者の多くの任務は、この時点で、自国民の安全と利益を守るだけであるが、自国民を脅かす危険を、不可抗力、特に、交戦者が彼らの退去に課す困難な条件のため、避けることができず、また、彼らに

1 パリは、晴、寒気極めて酷。
2 1月15日付官報。
3 上記官報。

事前通告し、その危険に備えさせる措置も取らせることもできず、上記の事態が生じている。

このような深刻な事態が発生し、パリ在留外交団員は、共同で、各大使館や公使館のない場合は、下記署名した領事団員は、その政府に対する責任感により、また、彼らの国民に対する義務により、協調し、決議することが必要と判断した。

下記署名者は、この合議の結果、一致の決議で、人類の権利の原則と認められた用法に従い、彼らの国民とその財産を避難所に入れられるような措置が採られるよう求める。

貴下が軍当局に対し、彼らの要求の趣旨に副った介入をされるとの信頼と希望を述べ、下記署名者は、この場を借り、伯爵閣下に非常に高い敬意を払うことをご理解するよう願う。

昨日、政府が広く市内に公開した一文書[4]は、先月27日ヴェルサイユ城のビスマルク普首相からパリ駐在のウォッシュバーン米公使が受け取り、それを見た上で仏外務大臣に通報した。

今月23日、我が軍1士官が書簡を仏軍前哨に届けるため、往復に軍使の旗を立て、セーヴル橋を去ろうとしたとき、仏兵がこの使者に向け発砲した。開戦して我が士官や随行のラッパ手が度々、通常といってよい位、軍使の権利に対する仏軍の誤解の犠牲となった。一時、軍使交換を止める他なかったが、改善が見られ、パリとの通常の関係維持が可能になった。しかし、23日の事件により、類似の侵犯の再発防止の保証がない限り、敵との通信の交換を止める他ない。私は、今謹んで閣下に、この事件をファーヴル外務大臣に告げ、このような違反への厳重な措置を求めるよう願う。もし国防政府が今後もなお軍使による書簡の往復の継続を望むなら、我々の主張の正当性を躊躇なく認め、我々の抗議した事実の調査を命じ、責任者を罰すべきである。我々は、将来への保証を含むこの点に関する満足できる回答を期待するが、国際戦争法規のより良

[4] 1月14日付官報。

心的な遵守がなされる保証の下でのみ許される関係を中断せざるを得ない。敬具。

1月2日、トロシュウ・パリ総督がこの書簡に答えた[5]。

ビスマルク独首相が示された、去る12月23日セーヴル橋の我が軍前哨に軍使として書簡を届けに来た独軍士官に発砲した事情につき、早速、厳しく調査させたが、指摘の事実を証明できる証人がいなかった。我が軍は、戦争法規の遵守を重要視するが、時に兵の誤解や粗野な知識からこのような事故が起こる。添付の2例は、このような事故が起きるのは、仏軍よりも普軍に多いことを示す。付け加えれば、ド・ラ・ロンシエール海軍少将の幕僚の場合、その場の独司令官が友好的な態度で謝罪し、受け入れられた。我らは、例外的事件が細心の注意によっても防げないと考え、普軍の団結の現れとして知られる規律の緩みによるとの偏見に立ち、これらを敵軍のせいにするものではない。

1月5日、ビスマルク独首相が、米公使を介し、軍使による連絡を再開すると回答した[6]。

1月11日、仏軍エリソン大尉がトロシュウ総督の独軍参謀長モルトケ伯宛文書を携え、セーヴル橋で普軍の前哨に届けた[7]。

パリ市外南部にある独軍の砲台からの砲撃が始って以来、サルペトリエール、ヴァル・ド・グラース、ピティエ病院、ビセートル救済院、小児科病院の、常に救助事業に携わる病院施設に、大多数の砲弾が達する。病院内で、婦女、児童、不治の者、負傷者、児童を含む病人を襲った弾丸の、同じ方向と角度という射撃の正確さ執拗さは、偶然とはいえない。パリ総督は、独軍参謀総長、伯爵モルトケ将軍にここに厳かに宣言する。どのパリの病院も以前からの任務を放棄しない。国際条約の条文や道徳と人道の法則に従い、普軍当局がこれら施設につき、その屋根の上に翻

5 上記官報。
6 上記官報。
7 上記官報。

る旗を尊重するよう命令することを確信する。以下略。

軍使が乱暴な砲撃を受けたこと。

第一に、仏軍エリソン大尉が、セーヴル橋の前哨から普軍前哨に使者を出した一件[8]。

1月11日正午、仏軍エリソン大尉が総督の一書[9]を携え、セーヴル橋の普軍前哨に、軍使の旗を持ち、赴いた。その軍使の合図の音を鳴らすと、普軍が同じく白旗を立てた。しかし、一向に士官が出て来なかった。さらに、ブルトイユの普軍砲台からポワン・デュ・ジュール向けの砲撃が止まなかった（軍令では軍使が来て会う時は、その合図の音に応じ、砲台の発砲を中止する）。半時間後、敵がその白旗を降ろした。エリソン大尉が何度も自分のラッパで発砲停止の合図をしたが、全く答えがなかった。敵の歩哨が彼とオーブの遊撃隊のミュテル少佐に発砲し、任務を完了せずに引き返さざるを得なかった。

第二に、右岸砲兵隊総司令官ペリシェール将軍のパリ総督宛報告書[10]。

1月10日、独軍軍使がセーヴル橋の我が前哨に到着したので、砲火を1時から2時半まで止めた。しかし、敵がこの中断を利用し、城壁のこの部分への砲撃を倍化した。敵の砲撃開始以降、これが一度生じた。我等は、当然、戦争法規と軍の名誉に忠実に従っている。国がこれを知ることが大事だ。

1月16日[11]

昨15日午後1時発戦況報告[12]による。今朝から敵軍の砲撃が実に苛酷で、今回の籠城後初めてである。我が諸要塞、城壁、外部砲台も激しく応戦し、幾つかの敵砲台を黙らせた。昨夜、デュクロ将軍が出撃し、敵兵を何人か捕虜にした。

その他、総督や前線の将軍から報告があったが、ただ小戦闘であり、特

8 上記官報。
9 上記のトロシュウからモルトケ宛文書である。
10 同日付官報。
11 パリは、雨。
12 1月16日付官報。

に異状がないので省略する。

パリ市内の市民の死傷。昨15日の夜、敵軍の砲撃が激しく、殊に夜半11時頃、最も過酷で、その砲弾が要塞に落ちず、高く飛び、市内の地区に雨のように降り、散乱するものが無数で、セイヌ河左岸地区が皆その被害を被った。また、最も遠くに飛んだものがサン・ミシェル大通りの噴水20メートル近辺に来て、パリの殆ど中央に達した。このため、この北部の地区の中に住む老若男女や児童の号泣する声が街に響き、皆その逃げ道を求め、この被害を避けようとした。今日午後、この辺の市街で逃げ走る者が右往左往し、特に混雑した。また、昨夜以来、この市街中での死傷者が180名、死者が30余名、負傷者が150名いるという[13]。中でも、児童が被害にあうことが最も多いと聞く。これは実に哀れである。この砲弾は、3万尺[14]を飛び、1発で数十名を倒すという。そうであろう。

パリ市民の死傷記録[15]。

パリ市内1月5日から13日夜まで日夜の砲撃のための死傷者の数が以下のとおりである。

5日から6日まで。夜間、敵砲台がモンルージュ地区等を砲撃し、サン・ミシェル大通り等に砲弾が多数落ち、オートイユ橋等にも多数が落ちた。多数の家屋が破壊され、26軒に多少深刻な被害が出た。死者5名を含み、死傷者が10名であった。

6日から7日まで。夜間、パリ市内への砲撃が続き、この夜も個人住宅にかなり重大な損害があった。負傷者が10名、内4名は、瀕死の重傷である。

7日から8日まで。夕7時から砲弾が市内に再び落ち始めた。そして、兵学校の近辺に落ちた砲弾が約百発であった。この夜7時から9時半まで一時間当り120発を数えた。この夜、犠牲者は、2名の死者を含む15名である。

13 出典未確認。
14 約1万キロメートル。
15 1月15日付官報。警察署からの報告による。

8日から9日まで。夜間と9日の朝、多くの砲弾が左岸に降った。夜9時から朝5時まで夜間監視兵が主に、5、6、7、14、15の各区に落ちた、900発の一つ一つを数えた。死傷者59名、内22名が死亡、37名が負傷。

9日から10日まで。夜間の砲撃回数が倍加した。サン・ヴィクトル地区等に300発を超える弾丸が飛来した。2時間にパンテオン付近に50発の砲弾が落ち、幾つかの場所で重大な損害を与えた。犠牲者は、48名に達し、12名が死亡、36名が負傷した。

10日から11日まで。夜間、左岸への砲撃が非常に烈しかった。監視兵報告では、夜9時から朝3時まで237発発射され、内89発がヴォージラール街に落ち、また38発がグルネルとサン・ジェルマン街の市中に落ちた。リュクサンブール宮殿、パンテオンやヴァル・ド・グラースが目標だったと思われ、8件の火災が報告され、50軒の住宅が多少酷く損傷した。死傷者は、13名、内3名が死亡、10名が負傷。

11日から12日まで。夜間、普砲台から250発発射され、125発が左岸の様々な場所、特に、ヴァル・ド・グラース、ノートル・ダム・デ・シャン等の地区に落ちた。被災した施設が盲学校（犠牲者5名）、幼児イエスと母性救済院（助産婦生徒5名重傷）等である。3件の火災と建物45棟の損害があった。死傷者21名、内死者1名、負傷者20名。

12日から13日まで。濃霧で砲撃の全影響が分らないが、250発がパリに着弾し、特に、植物園やノートルダム・デ・シャン等の地区に被害があった。死傷者13名、内死者2名、負傷者11名であった。

総計、5日から13日の朝までパリの人家、市街や路上で死傷した男女全てが189名、内死者51名、負傷者138名である（死者51名の内、児童18名、婦女12名、男子21名、負傷者138名の内、児童21名、婦女45名、男子72名である。死傷の児童は、39名、婦女57名、男子93名である）。1月17日[16]、

16 パリは、曇。

昨16日付戦況報告[17]による。日中、これまでよりも霧が薄く、我が城壁の砲兵隊から敵砲台が良く見え、反撃でき、モンルージュ、ヴァンヴ、イシの諸要塞の負担が減った。また、ノジャン城への砲火が続いたが、緩慢であり、全く効果がなかった。今朝８時頃、ミヨーの館への攻撃を我が軍が撃退した。この攻撃を鎮圧するため、バヌーから出撃の兵をモンルージュ要塞が長距離砲撃できた。マルヌ川の蛇行部への砲撃が続いたが、何ら損害がなかった、等。

パリ市中豪商等の救助事業。籠城が既に日数が長く、市内の貧者が生活に困窮する。そのため、この籠城の始めから、政府が救助の飲食所を設け、また、市中の豪商が協力し、その食物救援の道を開いた。新聞によれば、ウォレスという一豪商が市内の貧者救済のため、安い竈30万個の引換券として3万フランを提供した[18]。

食料のパンの定量。市内貯蔵の食料のパンは、既に欠乏し、政府は、今朝からパン屋に肉屋またはパン屋の食糧手帳を持つ者に限り、かつ、一日一人に売るパンの量を成人300グラム、5歳未満の子供150グラムまでとするよう、命令するという[19]。

1月18日[20]

昨17日正午発戦況報告[21]による。昨夜弱まっていた敵の砲火が今朝になり、再び激化した。シャティヨン砲台が砲撃を再開したが、現在まで、実害がない。昨夜、敵がボンディ要塞に対する襲撃を試み、撃退された。モンルージュ要塞への砲撃も今夜は、非常に激しいとは、いえないが、海軍士官1名が死んだ。南部砲台への砲撃も本日は、やや緩んだ。パリ市内も

17 1月17日付官報掲載。
18 1月16日付官報。1月15日付官報に上記ウォレスがジュル＝ファーヴル外務大臣宛に困窮者救援のため10万フランの寄付を申し出、外務大臣が感謝の意を表した返事を出した旨の記事が掲載されている。
19 1月19日付官報掲載のパリ市担当閣僚の18日付命令（19日から施行）。この命令を事前に入手したものと考えられる。当時、パンの成人宛配給量が1日500グラムに既に制限されていた。
20 パリは、曇霧。
21 1月18日付官報。

これまでと同じ地区に爆弾が多数落ちた、等。

昨17日、農商務大臣から市街に告示[22]があった。

徴用を免れた小麦、大麦、ライ麦を発見し、農商務省に知らせた者全てに、検査の上、麦の量100キログラムにつき25フランを褒賞として与える、等。

今日から食糧のパンの量が再び減り、一人一日の食糧300グラム（我が国の80匁である）とし、5歳未満の小児には、その量の半分である[23]。最近のパンは概ね雑穀[24]で作り、固く、重く、その分量が非常に僅かである。今日の市内の困窮が推察できる。

1月19日[25]

昨18日夜の戦況報告[26]による。昨夜以来南部の諸塞城に敵の砲撃は、続いたが、これまでよりずっと弱まった。そしてこの地にある我が諸塞城から砲撃を休みなく続けた。また、昨夜市内への砲撃があり、火災が生じた、等。

全市中への壁書きでの18日付国防政府宣言[27]。

市民諸氏。敵が我らの婦女や児童を殺した。昼夜我らを砲撃する。敵が我らの病院を砲弾で覆う。武器を取れ、との叫びが皆の胸から出ている。我らの中、戦場で命を捧げられる者は、敵に向かおう。残って兄弟と同じ勇敢さを示したい者は、必要ならば、祖国に尽くす他の方法で重い犠牲を払おう。つまり、耐え忍ぶか、死ぬかだ。しかし、打ち勝とう。共和国万歳。

軍務大臣・パリ総督臨時代理ル・フロ将軍の今日付全体命令[28]

パリ総督不在中、国防政府命令で、私が、パリ、諸要塞や前進基地守

22 同官報。
23 本日誌1月17日の記事の記載と重複する。20日の記事に再度出る。
24 コメやキビを指し、フランスでは滅多に食べない。
25 パリは、曇霧。
26 上記官報。
27 1月19日付官報。
28 上記官報掲載。

備に当たる国民衛兵隊、遊動隊や軍の指揮を任ぜられた。私は、本日付で、その指揮を執る。この結果、サン・ドニ要塞司令官以下諸指揮官（列記を省略）が私の直接指揮下に入る。彼らは、守備に関わる問題全体や詳細につき、私に直接関わることになる。工兵隊総司令官以下各指揮官（列挙省略）は、本日午後1時、軍務省に集まる。この会議が定例報告でもある。

1月20日[29]

昨19日朝10時10分モン・ヴァレリアン城発の戦況報告[30]による。ぼんやりした夜中の集結が困難で苦労が多かった。右翼縦隊に2時間の遅れ。モントルトゥーでの長く、激しい戦闘などあったが、我軍が優勢。今のところ、全て順調、等。

昨夜6時の戦況報告[31]による。昨朝以来、モン・ヴァレリアン要塞外で我が軍の兵10万人超の3軍団が強力な砲兵をもって敵に戦いを挑んだ。我が軍の左翼をヴィノワ将軍が指揮し、ド・ベルマール将軍とデュクロ将軍がベルジェリー丘陵の敵軍と数時間戦っている。総司令官の総督は、本日の最終成果を知ることができない。政府がそれを入手次第、パリ市民に知らせる。

1月19日夜9時50分モン・ヴァレリアン城発の戦況報告[32]による。今朝、幸先よく始まった戦闘は未だ期待した成果を挙げず、今朝我が軍が奇襲した敵が日没頃我が軍に対し、予備の歩兵と強力な砲火を集結した。午後3時頃、猛烈な攻撃を受けた左翼が崩れ、その左翼に出て指揮を司り、黄昏になり、引き上げを命じた。夜になり、敵の極めて激しい砲撃が続き、我が軍は、今朝攀じ登った高さを戻った。軍の士気は高い。我が損害をまだ知らないが、敵の捕虜によれば、敵の損害がかなり甚大だと判断する。

29 パリは、曇、夜雨。
30 1月20日付官報。
31 上記官報。
32 上記官報。

昨19日付国防政府令[33]による。穀類を貯蔵する者は、3日以内に農商務大臣に申告する。違反する者は、穀類を没収し、1,000フランの罰金を課し、3カ月の懲役とする、等。

新聞附録中の記事[34]による。昨日の戦闘の目的は、ベルジェリーの丘陵への襲撃とのことだ。そして、仏軍の3部隊を3将軍が指揮した。即ち左翼がヴィノワ、中央がトロシュウ、右翼がデュクロである。全軍が8万3千名、大砲が300門であるという。

新聞附録の記事[35]による。一昨日、大統領トロシュウ将軍が市庁舎から出陣するとき、諸大臣、各役人や諸友人に極めて懇ろに別れを告げた。その決意がこの出陣でその敵を追い払い、その勝利の功を挙げなければ、生きて再び市庁舎に入るまい、という決意と思われた。このため、その別れの礼が極めて厚かったのだと、等。

市内のパンの定めを昨日、政府が広く市中に発表[36]し、今後[37]、パンの配給量を毎日成人一人に300グラム[38]（日本の80匁）、5歳未満の小児に150グラムとし、300グラムのパンの値段を10サンチーム（日本の80文）と定めた。また、市内各区のパン製造販売店に夫々2名の国民衛兵と2名のその区の代表者を置く（その雑踏を禁じ、もめ事を制御させる）等となった。

市内の諸食料品、薪や炭が全て尽き、市中の困窮が非常に極まった。生活に窮する貧しい者が道で号泣する。憐れである。

1月21日[39]（和暦12月1日である。）

33 上記官報。同官報には、前記隠匿者の通報への賞金を定めた1月17日付農商大臣告示を廃止する旨の告示も掲載する。
34 出典未確認。20日付le Figaroは、ヴィノワ、ド・ベルマール、デュクロ3将軍指揮下の10万余名の軍とする。
35 出典未確認。
36 1月17、18日の本日誌の記事に記載の19日付官報掲載のパリ市役所駐在閣僚命令である。前記のとおり、本文掲載事項の他、販売は配給手帳所持者に限定する等も規定された。
37 1月19日以降である。
38 従来、500グラムであった。
39 パリは、曇霧。

20日朝9時30分モン・ヴァレリアン城総督発戦況報告[40]による。この朝霧が深い。敵軍の攻撃がなかった。私は、高所から砲撃されうる部隊の大半を後方に、中には以前の宿営地に、引き上げさせた。今は、負傷者の運送と死者の埋葬のため、2日間の休戦をセーヴルで緊急に交渉中である[41]、等。

1月14政府派遣部所在地ボルドー発急報[42]の抜書きによる。このほどシャンジー将軍は2日間の目覚ましい戦闘の後、マイェンヌの後方に退却せざるを得なかった。この時、敵は、フリードリヒ・カールおよびメクレンブルクの2将軍自身の率いた18万人と信じられる。しかし、我が軍の勢いが衰えたわけではない。同将軍が近い内に再び攻勢をかけると宣言した。この度の我が軍の損失は、大砲約12門と約１万人の兵士の捕虜であるが、敵軍の損失もまた莫大であった。以下略。

昨20日は、戦争がなかった。一昨日、ド・ベルマール将軍の陣の前で、一人の医官ドクター・シカンヌ[43]という人が弾丸の降る中に立ち、負傷者を輸送する指揮をしていた[44]。このとき、ド・ベルマール将軍は、その医官が弾丸により倒されることを恐れ、急いでその場所に進み、「医官よ、この場所からすぐに立ち退け、ここは貴殿のいる所ではない」と言った。この時、その医師が答え、「戦場の負傷者のいるところは、全て私がいるところである」と、一言言い放ち、動じなかった。人は皆、静まりかしこまり、その決意が確固であることに感心し、ほめたたえたという、等（私は、この新聞を見て、この医官がその職務をよく尽くす者だと思った。陣中の医官は、全てこのようであってほしい。そこで私は、今この文章を抄訳する）。

一昨日の戦闘でモンブリソン大佐という人が、小銃の弾丸をみぞおちに

40 1月21日付官報掲載。
41 21日付le Figaroによれば、休戦は20日午後2時から4時までの2時間に限られ、独軍前線外での負傷者の収容と戦死者の埋葬が行われた。
42 同日付官報掲載のド・ショードルディ氏から外務大臣宛。
43 シカンヌは、原文のまま。
44 出典未確認。

受けて忽ち倒れたという[45]。この戦いは、独兵の潜む一軒の家を襲うため、その部下の歩兵隊を指揮した時、その家の敵兵が壁の窓の間からこれを狙い撃ったという。付け加えて、この大佐がその一軒家を襲撃するために、なぜ自らその兵を従え、襲おうとしたのだろうか。また、なぜ大砲の2、3弾でその家屋を潜伏兵とともに微塵にしなかったのだろうか。惜しむべきことだという。

パリ籠城後、市内と仏国諸地方との書簡の往来は、全て例の伝書鳩を使い、行っている。そのため、独軍がこれを妨げようと、パリ城周囲の林の中に多くの鷹や鷲を放す。昨日、城外で、国民衛兵が一羽の鷹を捕まえたという。

1月22日[46]

昨21日、戦況報告[47]による。今日、敵軍と我が南部の諸要塞や城中との砲撃がことに激烈であった。また、我が一砲弾が敵の火薬庫を破壊し、爆発が強烈であった。パリ北部のサン・ドニ要塞と市には、今朝8時45分から敵の砲撃が始まり、日中非常に酷く、市内には、夕方になり倍加した。多くの出火は、すぐ消し止められた。要塞は軽微な損害しか受けなかった。今日、ノジャン要塞に敵軍は、いつものようにゆっくり砲撃を続けたが、効果がなかった、等。

トゥール・デザングレの地で我が軍の砲弾が敵の火薬庫に入り、たちまち破裂し、その震動や爆音は非常に驚くものだった[48]。

パリ市民の死傷記録第2号[49]。

13日から14日。13日夜8時から敵の激しい砲撃が再開され、一時緩んだが、その夜中と翌14日の日中続いた。500発余りの砲弾が市内に降った。明け方2時から朝5時までの間1時間に100発の砲弾が発射された。

45 1月20日 le Figaro紙にモンブリソン中佐・伯爵がビュザンヴァルの塹壕の中で瀕死の重傷を負ったことが報じられている。
46 パリは、曇、午後小雨。
47 22日付官報掲載報告の要約。
48 出典未確認。
49 下記記載の官報掲載報告の正元による要約。

103軒の民家が被災した。幾つか火災も生じたがすぐ消し止められた。死傷者が33名。

14日から15日。砲弾が我が要塞と共に市中にも夜8時から朝7時までの間に500発余り飛来した。等々。死傷者が31名。

15日から16日。要塞と市中に夕方7時から朝9時まで、300発の砲弾を数えた。死傷者は、21名[50]。

16日から17日。砲弾の飛来数は、前の夜から減り、市中の人家や道路上に落ちたものは189発であった。35軒の家屋が損害を受けた。死傷者が14名[51]。

17日から18日。前日やや収まっていた砲撃がやや活発だった。家屋が多く損傷した。死傷者は、20名[52]

18日から19日。昨夜市街中に降った砲弾の数は、前の夜よりも多かった。死傷者30名[53]。

19日から20日。夜、市内への砲撃が前夜と違い、夕方極めて僅かで、真夜中から朝にかけ激しく、午後また緩んだ。一砲弾が地下蔵に入り、石油3樽を破裂させた火事1件しか報告がない。負傷者が9名[54]。

以上の市中の死傷者は、13日から20日まで、男女老幼合わせて58名であった。

パリ市内の騒乱。昨21日夕刻､市内ベルヴィル街中で市民が多く集まり、再び政府の変革を図った。これは、昨年の秋10月30日の変革と違い、獄中に閉じ込められた首領のフルーランス[55]という者を密かに奪いだすことを企て、夜半12時過ぎ、若干の国民衛兵小隊が密かにその獄房に突入し、フルーランスを奪い、今日午後3時半から4時までの間に、この街中の国

50 以上17日付官報。
51 18日付官報掲載。
52 19日付官報掲載。
53 出典不明。20日付官報に掲載なし。
54 21日付官報掲載。
55 フルーランスは、10月30日騒動の首謀者として、11月1日付で国民衛兵志願兵第1大隊長を罷免された（1870年11月2日付官報）。

民衛兵が隊を組み、政府のある市庁舎に押し寄せ、不意に襲撃し、政変を起こそうとした。しかし、予め、市庁舎の不慮の事態に備え、兵隊や非常警衛のため地方から呼び集められた国民衛兵がその周囲に集まっており、急に襲来する国民衛兵を防ごうとした。その時、国民衛兵隊の中から市庁舎の窓の中に向け、ピストルを撃ち出し、館内に死傷者が出た。また、この時、警備の国民衛兵も同じように国民衛兵隊に向け発砲し、双方に若干の死傷者があった。国民衛兵が約50名余り死傷したという。私は、夕暮れにその事件を聞き、自分もその状況を観察したくなり、すぐに駆けつけたが、市庁舎に着いた時は、既に夜中の8時だった。館の周囲を巡って観察したところ、既に騒乱や争いは、終わり、館外の周囲には数多くの兵隊が警衛し、また、近くの街や通りには市民が群れ集まり、右往左往し、議論がやかましかった。道路は、とても通れない。さらに、雨の後の泥が溢れ、道路がまるで沼のようで、灯火も薄暗く、道は暗黒なので、その混乱は言いようがない。私は、今夜ここに駆けつけて来たが、時間に遅れ、その争いを目の当たりにできなかった。しばらく、あちらこちらを回って、群衆の中を通り抜け、騒乱や混迷の状態を観て、帰路についた。時刻は、既に9時を過ぎていた。

1月23日[56]

昨日、国防政府は広く市中に発表[57]した。

国防政府は、パリ軍総司令官を国防政府大統領と分離することを決めた。ヴィノワ少将がパリ軍総司令官に任じられる。パリ総督の称号と任務は廃止される。トロシュウ将軍は、国防政府大統領の地位に留まる。

当日、ヴィノワ総司令官がパリ城の諸軍に次のように命令した[58]。

国防政府は、私を諸氏の頭に据えた。私の愛国心と献身に訴えた。私に逃れる権利はない。その任務は極めて重い。私は危機を受け入れるし

56 パリは、曇霧。
57 22日付官報。
58 23日付官報。

かなく、幻想を持つことは許されない。輝かしく軍と国民衛兵に支えられ、パリ市民に雄々しく支援された、4ヶ月を越える籠城の後、我々は困難な局面にある。このような状況の中で司令官という危険な名誉を断ることは、私に対する信頼に応えることにはなるまい。私は兵士であり、この大きな責任が伴う危険の前から逃れる積りはない。内部では、混乱分子が活動し、大砲がうなる。私は最後まで、兵士でありたい。善良な市民と軍と国民衛兵の支持は、私が秩序と公安を維持するのに十分であることを信じ、この危険を受け入れる。

パリ市長ジュル＝フェリーから市中20区各区長宛昨夜5時40分付書簡[59]による。国民衛兵第101大隊の1中隊が市庁舎を襲撃し、激しく銃撃した。遊動大隊副官1名が3発の銃弾を受け倒れた。到着した国民衛兵とパリ憲兵隊が鎮圧した。近くの家に隠れていた国民衛兵12名と士官1名に第101大隊の大尉が捕えられた。かなりの兵が市庁舎と周囲を守り、秩序に不安はない、等。

国防政府閣僚等の市街への22日付宣言[60]。

市民諸氏。

祖国と共和制に対する恐ろしい犯罪がなされた。これは、外国の利益に奉仕する少数の者の仕業である。敵が我らを砲撃する間、彼らが狙った国民衛兵や軍の血が流された。彼らの犯罪的欲望を満たすため、血を流させた者の上にその血が注がれる。政府は、普国に対抗する主要な力の一つである秩序の維持に責任を持つ。この大胆な蛮行への厳しい鎮圧と法の厳正な執行が市全体の問題である。政府はその義務を必ず遂行する。

新聞を見ると、昨日市庁舎に反逆者が暴動をして、双方の遊動兵、国民衛兵の即死が6名、負傷が40名余りあった。また、近くを通った市民の内、老人1名、小児1名が、流れ弾に当たって即死したことが記されてい

59 24日付le Temps
60 23日付官報。

た。普軍のスパイは、未だに市内に潜伏していたが、昨日暴動があったため、パリ総督居宅の門前で1名を捕え、またセイヌ河左岸の街中で2名を捕えたという。普国が、そのスパイを多く市内に入れていたことは驚くべきだ[61]。

（昨日、パリ総督、共和政府大統領と3軍（歩兵、騎兵と砲兵）司令官を兼ねたトロシュウ将軍がパリ総督と三軍司令官を辞し、共和政府大統領職に留まった。昨日、政府が広く市内に公開し、私は、この新聞の発表文を読み、また、紙の端に愚論を書き入れた。）

まず両国の戦争が盛んになり、その勝利の風は、しきりに普軍の上に生じ、仏軍が日夜、敗走し、8月下旬、ナポレオン皇帝がその指揮剣を名な老練の3司令官に譲り、内外の軍事指揮を託した。その要点は、

1　諸軍を統率し、出陣し、軍中の指揮を執るのは、バゼイヌとマクマオンの2司令官である。この2人が全軍を前後二手に分かれ、指揮する。これを軍中の二総督両翼司令官という。

2　パリ城に入り、守り、その城の総督となり、市内の諸務を総括するのがトロシュウ将軍であり、これを本城の大総督将軍という。

この3司令官の職掌は、あたかも鼎のようであり、その大任が内外で比較された。そして3司令官の出所進退を見ると、左翼のマクマオン元帥は、仏帝を擁り、軍を率いてスダン城へ入り、数日将兵の死体が地に満ち、鮮血が野に溢れる苦戦の後、9月2日の接戦で、砲弾に触れ、重傷を負い、ついに敵の捕虜となった。その翌日スダン要塞が陥落し、仏帝もまた10万名の兵と共に敵の捕虜となった。右翼のバゼイヌ元帥は、数回接戦の後ついにメッス要塞に入り、70余日の籠城と苦戦により、弾薬食料が共に尽きた後、10月27日ついに開城した。この2司令官の行為が状況の下、やむをえなかったといえるか、その職務を尽くしたといえるのか。

二に、トロシュウ・パリ総督が籠城防戦の総督となった後、9月4日、政治体制が一変し、新たに共和制度を開始した時に、市内では、彼に共和政府の大統領職を兼ねさせた。そして市内のこと、出所進退全てその胸中

61 出典未確認。

に任した。加えて、パリ総督を兼任し、本城の3軍を統率し、政府と軍事の双方を兼ね、仏国の興廃を自ら担い、その任務の尊さ、重大さがこれ以上のものがない。そして200万余人の市民が皆敬い、望んでその命令を承る。しかし、籠城は、既に4か月余り、出て行って敵を追い払うという功を挙げることが一日もない。戦争の成り行きや変化を一日で総括できないとはいえ、その軍の指導力が伸びず、城中でほぼ50万余人の兵を擁するのに、これを危険を冒して敵陣を破り、その活路を開くという防衛戦を見ないまま、既に100日余過ぎた。その処置は、ただ、市内の人心を鎮め、激動を防ぐことに熱心で、出て行き、敵を追い払うという策がない。専ら、地方の応援の兵を待つ積りで、自ら突撃する策を出さない。このため、市内では大きく失望し、その振舞いを憤り、怨むようになった。そして、市内の食料は尽き、兵は疲れ、落城が間近に迫り、その開城が切迫してから、総督職を辞し、軍の指揮を放棄し、専ら国防政府大統領職に留まり、政府の場に座っている。その進退出没や功績が分からない。私が外国人の目でこれを見ると、このような内外の重要な職にいて軍事に務める者は、自分の身も忘れて努力し、その策略が成功しなければ、出陣し、軍の先頭で死ぬ他ない。その上、彼は、先日広く市内に発表した言葉があった。言うには、パリ総督職は、決して開城しない等々。この一言がまだ広く市内200万人余りの耳に行渡らない内に、急に総督の職を辞め、転居した。もし、市内の穀物が全て尽きたらば、総督職がどのようにその籠城を続け、どのように200万人の命を救えるのだろうか。思うに、この一言はその日の詭弁であり、落ち着かない人民を一日、一時逃れさせる嘘というべきだろう。

今日、仏国の地方の諸新聞が回って市内に来たものを見ると、正月７日、普軍本陣発の新聞報告の中に、この度普軍の本陣に、各国の軍務士官が軍陣や戦争の事情、状態を観察するため、来客となっているという。そこには、露人、英人、墺人、伊人、そして日本士官9名が来たと記してある。私は、この文を見て、心が高く躍り上がった。私は、この戦争の始まった8月5日から数冊の書簡を作り、この戦争の状況を報告するため、急ぎ、我が日

本の西郷、山県、三堀、船越の諸士[62]に送った。そして我が国の軍の諸士官が当地に来て、この戦いの状態を直接観察することを内心待っていた。常にその書簡到着の日から、その士官が航海にかかる日数時間を推し測り、指折り数えて待っていた。度々、このパリに留学の同士友人と語り、その時を仰ぎ、待ち始めてから、既に何日も経った。しかし、籠城中、書簡の往復ができず、当地の友人で、わが日本の状況の便りを得る者が全くなくなり、既に6か月過ぎた。その中で、今日、この新聞で、我が国９名の軍事視察官が普軍を訪問したと聞き、今日の愉快さは、これに勝るものがない。私は喜び、その新聞を何回も繰り返し熟読し、眠りを忘れ、筆をとって、気分よくそのことを記すばかりであった。

1月24日[63]

23日付戦況報告[64]による。夜緩みながら続いた砲撃も日中再び活発となった。また、我が南部要塞からも敵の砲台に発射を続けた。海軍砲兵が午前中に、シャティヨンの左の砲台の火薬庫を爆発させた。午後2時から敵の砲火は止んだ。東部では、普軍がシャラントン要塞から5,000メートルのところに6つの切り込みのある砲台を作った。同日、砲撃が烈しかったノジャン要塞の南部前線は、分からないが、東部の要塞への砲撃は緩慢であり、1名の軽傷のみ。北部、サン・ドニ城への砲撃が烈しく、新たな砲台が造られた。昨日ブリッシュ要塞中に落ちた弾数は、約1,000発であった。そして、敵軍は、我がヴィルタニューズおよびエピネの塹壕に、砲台を築こうとし、要塞から300メートルの近くまで偵察をした。今日西部の諸要塞では、大した砲火はなく、日中のある部分、命令で止んだ。

市中に発表の22日付国防政府令[65]。

幾つかのクラブを基にした犯罪的扇動があり、民衆皆が非難する何人

62『漫遊日誌』によれば、1870年3月3日、パリ到着当日、同宿の西郷信吾（従道）、山県狂介（有朋）、三堀耕介に会い、5月下旬頃まで交際した。
63 パリは、曇。
64 24日付官報。
65 23日付官報。

かの扇動家が内戦を始めたこと、現下の状況で、祖国にとり危険であり、再発すれば、これまで申し分のなかったパリ防衛の名誉を汚す憎むべき策略を終らせる必要があることを考慮し、籠城が終わるまでクラブを禁止し、その場所を閉鎖する。この命令は、警視総監が実施する。

第２の22日付国防政府令[66]の発表。

第1師団の軍法会議の数を2から4に増加し、新たな軍法会議は、軍務大臣が直ちに設置し、予審判事等を任命し、この命令は、制定と同時に発効する。

22日付国防政府令[67]による新聞の発禁。

『レヴェイユ』[68]と『コンバ』[69]の両紙は、連日、内乱を扇動し続け、国家の安全への犯罪が発生し、その発行が市と防衛に危険となり、パリの現状が政府に戒厳令上の手段を執る義務を生じさせたため、発禁とし、警視総監がこの命令を執行する。

1月25日[70]（籠城今日既に130日である。）

ド・ヴァルダン軍参謀長[71]の24日朝戦況報告[72]による。去る19日、一戦の後、敵軍が再攻勢に備え、所々でその砲台を築造した。第6地区（パッシィとポワン・デュ・ジュール）で砲撃が続いたが、負傷者が1名だけであった。南部のイシ要塞では、長い間隔での砲撃が夜中続いた。シャティヨンとバニウーの間の敵の工事は続いている。モンルージュ要塞では、損害を補修した。この要塞の守備兵のエネルギーは、砲撃開始以来、良く発揮されている。ノジャン要塞では、この城から3,500メートルの距離に敵が新たに築いた2砲台から砲撃された。今朝、砲火が強まった。北部のサン・ドニでは、烈しい砲撃が続いたが、損害は軽微だった。東要塞での死者は、1名、

66 上記官報。
67 上記官報。
68「目覚め」の意味。
69「戦い」の意味。
70 パリは、曇。
71 戦況報告は、原則として、軍参謀長名で発表される。
72 25日付官報。

負傷者は、7名、ドゥブル・クロンヌ要塞では負傷者は、7名であった。

ド・ヴァルダン将軍からの24日夜の戦況報告[73]による。第7地区の壁を越えた敵砲弾は、22発であった。北部では、新たな2砲台がドランシー等を砲撃した。オーベルヴィリエ要塞では、3名が負傷した。東要塞には、この朝7時から夕4時まで、244発発射され、6名が傷を負った。砲火が特に、ラ・ブリッシュ要塞に集中したが、負傷者が僅か2名であった。サン・ドニ要塞への砲撃が2時から烈しくなった。新たな労働者が見られたオルジュモンの丘から城壁に向け何発か砲弾が発射された。

ビスマルク独首相の返書。去る13日、パリ在勤の各国全権公使10余名が連名で一文書を送り、パリ城砲撃の予告の規律を質した。同氏の1月17日付返書の内容[74]が次のとおりである。

公使殿　今月13日付、貴殿と米国公使や当時パリ市在勤の多数の外交官連名の書簡を頂く名誉を得た。その書簡は、私に人類の権利の原則に基づき、署名者各国の国民にパリ包囲の間、彼らとその財産を避難所に入れる措置をとるよう軍当局への介入を求めるものであった。

遺憾ながら、署名者が私に名誉をもって要求されたことを、正当化するのに必要な根拠が国際法の諸原則にあるとは、認められない。

近代歴史の中で約3百万の住民を閉じ込めて、大国の首府を要塞化し、その周囲を巨大な要塞化された陣地にするという独特の決心が住民にとり、酷くて、非常に残念な状況を生じていることは、明らかである。この責任は、全て、その首府を要塞と戦場に変えた者にある。どんな場合でも、要塞の中に住まいを選び、戦争中そこに滞在する者は、その結果生じる不都合に甘んじなければならない。

パリは、フランスの中で最も重要な要塞であり、その中で敵は、住民の中で要塞化した位置から出撃あるいは砲火で独兵を常に攻撃する、その主要な兵力を集中しており、独軍将軍にこの要塞化した場所への攻撃

73 上記官報。
74 25日付le Temps等。ケルン・スイス連邦公使宛である。

を止めさせたり、その目的に反するような軍事作戦を行ったりするよう求める議論に根拠はない。

ここで許しを得て、思い起こして欲しい。中立国国民の平静さを包囲に不可避な不便と危険から守ることを見過ごしたことは全くない。去る9月26日、フォン・ティレ次官がこの件について回状をベルリン駐在公使に送付し、又、私自身、教皇大使閣下その他パリ在勤外交官宛10月10日付書簡でこの都市の住民が今後軍事作戦の影響を我慢しなければならない旨知らせた。10月4日付の第2の回状は、極限まで延ばされた抵抗が非戦闘員のパリ市民にもたらす結果を強調するものであった。同月29日、私から米国公使にその回状の内容を伝え、同時に外交団員にも伝えるよう依頼した。

上記により、包囲された都市から脱出するようにとの警告と勧告が中立国民に戦線を横切る許可を与えるという国際法の原則ほどには規定されたものでなく、友好国の市民に対する人道への気持ちと証として示す尊敬から出たものに過ぎないとしても、中立国の国民に不十分とはいえない。

私が去る9月20日付ジュル＝ファーヴル氏宛の手紙で砲撃につき、述べたように、人類の法の適用と原則の上で、包囲軍が包囲戦で行おうとする作戦を包囲された方に警告する必要がない。抵抗が長引けば、パリ砲撃が起こるべきことは明白であったので、結局、それは予期すべきことであった。このように要塞化され、かくも多数の軍と兵器を持つ重要な都市の例をヴァッテル[75]は、知らなかったとはいえ、彼は言う。

「一都市を砲弾と赤い弾丸[76]で破壊することは、大きな理由がなければできない極端なことだ。しかし、それが戦争の勝利を左右する、または我々に危険な打撃をもたらす重要な場所を減らす他の手段がなけれ

75 スイスの法学者（1714-1764）で国際法の権威。
76「赤い弾丸」は、昔の球形の砲弾を熱して赤くしたもので、これにより破壊力と火災が増えた。フランス語の表現"tirer à boulets rouges"は、「激しく攻撃すること」を意味する。

ば、戦争法上、認められる。」と。

現実には、パリ包囲に反対する理由はもっと弱まる。我々の意図は、パリを破壊すること（これがヴァッテルの導いた原則により、許されるであろうとしても）では全くなく、仏軍が独軍への攻撃を準備し、その攻撃後彼らが避難する中心の要塞化された場所を維持できないようにすることである。

結局、公使閣下と今月13日の書簡の署名者に申し上げたいことは、私が思い起こさせた警告の後は、この数ヶ月ずっと中立国民に、請求すれば、国籍と身分証明書を示すだけで戦線を越えることを許し、前哨では、今日まで、外交団員と政府代表またはその外交代表が必要と認めた者にその旅行が続けられるよう通行証を交付してきたことである。今月13日の書簡の署名者の何名かは、数ヶ月前から、戦線を越えることができることを予告され、かなり前からそれぞれの政府からパリ退去を許可されていた。

中立国代表が我々に好意的待遇を求める、数百名の中立国の国民の状況も同じである。我々は、こんなに長い間彼らが持つ許可の利用を妨げる理由について、確実な情報を持たない。しかし、もし個別の報告を信じれば、彼らやその外交代表の出発を邪魔するのは、仏当局である。もしこの情報が正確ならば、その意に反し、引き続きパリでの滞在を強いられる者には、その苦情や抗議をその現政権の代表にするよう勧めることしかない。いずれにせよ、上記により1月13日付書簡にある、署名者の国民が「交戦者により彼らの退去に課された困難さのため危険を避けることを妨げられる」という主張を、独当局に関する限り、認めるわけにはいかない。

我々は、現在でも、包囲の現段階で、軍事作戦上、どんなに困難で有害であろうとも、国際礼譲上の義務として、外交団が戦線を越えることを認めている。その多くの国民について、現段階では、要塞の包囲に不可避な危険からの保護としては、パリの降伏以外の手段が見当たらない

のは、残念である。軍事的観点から、5万人と見積もられる人々の一部でも家族と身の回り品を伴い、パリから脱出することを認めても、我々には、彼らにこの市の包囲前に仏当局が退避し、物資を取り除いた地域を越えるのに必要な食糧を与える手段も、輸送手段も欠くのである。我々は、非戦闘員であるパリ市民の苦痛に同情して軍事行動を控えることができないという悲しい状況にある。我々の行動方針は、戦争に伴う必然性と敵軍の新たな攻撃から自軍を守る必要性により厳しく定められる。

我々が困難な状況でも示してきたジュネーヴ条約を良心的に遵守する上に、独軍の砲火が婦女、児童、病者の居る建物に意図的に向けないと保証するのは、蛇足であろう。パリの要塞化の性質とその砲台との距離とにより、我々が残したいと願っている建物が偶然損害を被るのを避けるのも、包囲の度に悲しむべき、非戦闘員の市民が傷つくのを予告するのも難しい。我々が心から残念に思うこのような辛い事故が包囲された他の要塞よりもパリで大規模に起きているならば、要塞にすること又は一定期間以上守備することを避けるべきだったと結論すべきだろう。いかなる場合でも、どの国も、その隣国に宣戦した後は、敵に無害の市民、要塞内に住む外国人、病院に対する敬意を払うよう求めながら、その病院に軍が戦いを終わる度に別の戦いを準備するために避難し、その主要な要塞を降伏から免れさせるようなことを許してはならない。

公使閣下、私の返事の内容の1月13日の書簡の署名者へのお知らせを願い、また、私の敬意を重ねて確認する。

フォン・ビスマルク

1月26日[77]

25日付戦況報告[78]による。敵の砲撃が夜間、大きく緩んだが、長い間隔を置き、全線で継続した。南部では、毎日、砲台の増築が続いた。第8地区への砲撃による2件の火災があった。東部は、夜は静かであった。ノジャ

77 パリは、曇。
78 26日付官報。

ン要塞で夜中に2名、朝2名が負傷した。北部では、オーベルヴィリエ要塞では3名が負傷した。ラ・ブリッシュ要塞に500発砲弾が落ちたが、誰も負傷しなかった。ドゥブル・クロンヌ要塞で3名が死亡、5名が負傷。東要塞では、烈しい砲撃であったが、3名が軽傷であった。また、イシ要塞等に敵の砲撃が日中、烈しかったが、夕方、弱まった。負傷者がそれほど多くない。イシ要塞に1名、モンルージュ要塞に4名、第8地区に5名、ラ・フェザンドリー要塞に2名、ヴァンセンヌ要塞に7名、ノジャン要塞に1名、ドゥブル・クロンヌ要塞に2名、東要塞に7名、ラ・ブリッシュ要塞に3名であった（その死傷者が全て32名のみであった）。本日、ロニー要塞が45発、砲撃された。サン・クルー村の火事が燃え続けた、等。

休戦講和の糸口。

昨朝、ウォッシュバーン米国パリ駐在公使が書簡を送ろうとした[79]。この書簡がファーヴル仏外務大臣からビスマルク普首相宛の一文書である。やはり休戦講和の交渉を始める糸口だろうという。

今朝、新聞を見ると、政府に漸く講和が生じる機運がある状況という。新聞記者が今もし和平を図れば、両国間の交渉の大体の落着き先として附言する項目を次に掲げる[80]。

講和条約

1　10年間で払う100億フランの賠償金。

2　普国によるアルザスとロレーヌの10年間の占領。

3　その10年後、かつ賠償金の完済後、アルザスとロレーヌの住民投票による普国への併合または仏国への返還の問題についての意思の表明。

4　この2地方の仏国への返還の時のアルジェリア（アフリカ州の内、仏領の地）の普国への譲渡。

5　仏国による独統一の承認[81]。

79 出典未確認。
80 27日付le Figaro引用の前日のla Vérité。

6　　独帝国による仏議会制共和国の承認。

休戦の協定（講和会議の前に成立する協定である。）

普軍は、パリ周囲の17要塞を全て占領する。ただし、パリ市内には決して入らない。これは、休戦の約束である。その休戦協定が成立すると同時に、直ちに、パリの政府からボルドーの仏政府派遣部に伝え、諸軍や全国の地方から召集の兵を集め、その兵器を回収する。この時、もし仏全国の兵がパリの休戦に応じず、なお、普軍に抵抗し、戦う等となれば、パリにいる3軍隊は、全て軍事上の捕虜となり、普国に送られ、パリ城を全て普軍が占領する。

普軍本陣ヴェルサイユからの新聞掲載の報道[82]次のとおり。

1月16日付報告。一昨日、ル・マン西方の戦闘で我が軍が仏兵400名を捕え、我が軍の死傷が士官1名、兵士19名であった。ボーモンでは軽い市街戦の後、我が軍が捕虜約1,000名と弾薬輸送車40両を得た。

1月17日付報告。15日、ベルフォールの南で、ヴェルダー将軍が仏軍に襲撃されたが、9時間の戦闘の後、全て撃退した。我が軍の損失が300名である。パリ近辺で敵と交戦し、士官2名と兵士7名を失った。今日まで届いた第2軍の報告では、去る6日から12日までの戦闘で我が軍の死傷は、全部で3,380名、内177名が士官、残り3,203名が兵士であった。現在まで敵の損失は、負傷していない捕虜22,000名、軍旗2本、大砲19門、満載の輸送車1000両超、数多くの兵器、弾薬、戦闘用物資であった。

1月18日付報告。16日、ヴェルダー将軍が陣地を維持した。シュミット将軍が仏兵2,000名余を捕虜とした。17日、ヴェルダー将軍がブルバキ仏将軍の新たな攻撃を撃退した。3日間の我が軍の死傷者が1,200名である。パリ近辺の砲撃が続き、成果が満足できた。我が軍の死傷者が士官3名、兵士7名であった。

1月21日付報告。19日、夕刻、サン・クァンタンを占領した。この

81 独帝国は、1月18日、ヴェルサイユでのヴィルヘルム1世の皇帝戴冠式により成立した。
82 26日付官報掲載の「ヴェルサイユの官報」（以下「ヴェルサイユ官報」という。ドイツ側情報となる）抜粋として掲載されている。

時、敵の負傷者2,000名を数えた。20日朝までの敵兵の負傷しない捕虜が7,000名、大砲６門を得た。19日、パリ近辺で400名損失した。敵軍が死者の収容のため、48時間の休戦を求めたほど、敵軍がかなり死傷した。敵兵500名を捕虜にした。

1月23日付報告。パリ砲撃は、毎日絶え間がない。一昨21日、北部のサン・ドニ要塞に砲撃を始め、サン・クァンタンの戦い後、負傷せず、捕虜となる仏兵が9,000名に達した。同夜、ベルフォール要塞の傍の森等を占領した際、我が軍により負傷せず捕虜となった仏兵が士官5名、兵士80名である。パリ近くで、サン・ドニ要塞への我が軍の砲撃が良い成果を挙げ、敵砲火は、ほぼ沈黙した。パリとサン・ドニでは、所々で火事があった。我が軍ドブシュッツ中佐指揮の遊撃隊がブルモンの近辺で国民衛兵を敗走させ、敵が180名を失い、味方の負傷者が僅か4名という、等。

パリ市城内は、飢渇し、寒さに凍え困窮する。

昨日から市内に配給するパンが極めて下等品で、色に黒や赤が混じり、味が極めて悪く、まるでキビや糠を混ぜ、作ったもののようで、中に塵や藁の類が多く混じり、なかなか食べられなかった[83]。しかし、籠城と飢渇が既に永く、徐々にその粗食に慣れてくる。既に130余日の永さと、その飢えが酷くなり、味の良し悪しを問題にする余裕がない。ただ日々の生活を維持するだけである。今、パリ中の犬、猫、鼠を大体10中7、8を食べ尽くした。この3種類の肉がいずれも高価で、大犬の股肉の値段が77フラン、（即ち我が国の1両1分2朱）、猫1匹が8フラン（即ち2朱である）、鶏卵一つの値段は20フラン（即ち我が国の1分2朱）であり、諸物品の値段が高いことが推量できる[84]。そうしてこのような物価の沸騰は、全く物品の不足から生ずるものである。

83 26日付le Figaroは、パンの原料構成比を、小麦30%、ライ麦20%、カラス麦20%、米30%とのある紙報道を引用する。
84 貨幣換算が1両当り56フラン（以前は5フラン）となる。

パリ市民の死傷記録が次のとおり。

22日から23日まで、前日に等しく、この夜市中に砲弾が乱れ落ち、所々が焼き尽くされ、市中での死傷は、16名、内、児童が3名、婦女が5名、男が8名であった[85]。

23日から24日まで、この夜、市中に落ちた砲弾は、128発で、市民の死傷は、12名、内児童が3名、婦女が4名、男が5名であった。南部地区で41軒の家屋が損傷した[86]。

24日から25日まで、セイヌ河左岸に夜間、砲弾101発が落下し、2軒の建物が損壊した[87]。市民の死傷は、22名、内児童が2名、婦女が2名、男が18名であった[88]。

25日から26日まで、砲撃がぶり返し、セイヌ河左岸への砲弾が、一晩で79発から137発に増えた。15発がヴァル・ド・グラース病院とサント・アンヌ精神科病院に落ち、3件の火災が報告された。死傷者数は、3名、内、男が1名、婦女が2名である[89]。

22日夜から26日朝まで、市民の死傷者総数は、53名となる。

1月27日[90]

1月26日付戦況報告[91]による。昨夜、敵軍の砲撃が南部と東部前線で緩慢であったが、要塞へは、激しかった。またヴァンヴ、イシとモンルージュ要塞が前夜の損傷を日中修理し、死傷者が若干あった。北部諸要塞は、敵の激しい砲撃目標であったが、死傷者は、全部で19名であった、等。

和平交渉議の対応。

昨朝、ジュル＝ファーヴル仏外務大臣がパリを出てヴェルサイユ城の

85 出典未確認。24日付官報によれば、パリ市内では、5区と16区のみに砲撃が集中し、1名負傷したが、サン・ドニ市では、烈しい砲撃を受け、21日から22日にかけ、死者15名、負傷者ほぼ同数であった。
86 26日付官報。
87 出典未確認。
88 27日付官報。
89 上記官報。
90 パリは、曇。
91 27日付le Figaro。

普軍本陣に行き、昨夜８時再びパリに帰った。その後直ちに、国防政府大統領以下諸閣僚諸職を集め、会議した。その夜半12時、再度この会議が開かれた[92]（この会議を他人が聴けなかった。そこで、その事情を知る者がいなかった）。

発砲停止。

昨夜8時、ファーヴル外務大臣が城に入った後、全地区と全要塞司令官に夜半12時から発砲停止命令が出た[93]。また、普軍のパリ市、外壁や砦を攻撃する者も、この夜12時から全く発砲を止め、双方、静かで穏やかになった[94]。昨夜半から仏軍前営の諸陣営全てが兵を引き上げ、陣を引き払い、諸要塞に入り、あるいは市内に入り、その前営対陣の軍事行動を全て停止したという。この度の休戦の条件は、来る29日に仏全国に普く公布される。そしてこの講和は、交渉の期間が3週間、即ち1月28日から起算し、2月19日までの21日間だという。この講和の交渉中、直ちに一つの鉄道を修理し、国境の蒸気車を修理し、電信機を造築し、また修理等をする。

軍務省の記録記載の、パリの内外3軍隊（正規軍、国民衛兵、遊動兵）の兵数を見ると、パリ籠城の守備兵は、軍、海軍、国民衛兵、遊動兵合わせて28万人、遊動兵の予備の諸隊は、10万人、以上38万人が皆、城郭外駐屯の部隊の兵である。大砲の位置や砲台の数が135ヵ所、一ヵ所当り6門から７門を備える。その砲数総計は、810門である。パリ周囲諸要塞中の兵が10万人である。敵陣を襲撃するため、城郭外に駐屯する部隊が９部隊、隊毎に２万人ずつであり、総計は、18万人。又、砲数は、648門である。控えの応援兵10万人、大砲隊27隊、その砲数は、162門である。16要塞と諸陣営に駐屯し、パリ城外に出て、戦闘に当たる諸兵の総数は、76万名、砲数の総計は、1,620門であるという。右の兵数と砲数の総計は、パ

92 28日付le Temps引用のla Vérité。27日付le Figaroは、ファーヴル外務大臣が過去3日間2回ヴェルサイユに往復したとする。
93 上記le Temps引用のla Vérité。同日付le Figaro引用のle Nationalは、ヴィノワ将軍が命令し、ロニィとノジャン要塞が最後に発砲を止めたと記す。
94 28日付le Rappel。

リ市内の砲台を守る遊動兵を除く計算である[95]。

1月28日[96]

26日付政府から市中への宣言[97]。

政府は、援軍の到来を当てにできた間は、パリ防衛を長続きさせるために、何も無視しないことがその義務であった。今、我が軍は健在であるが、勝利の可能性が遠のいた。一軍はリールの城壁の下にあり、別軍は、ラヴァル近傍にあり、三番目の軍は、東部国境にある。我々は、彼らが近づくという希望を失い、我々の持つ生活必需品は、猶予が許されない。この状況で政府は交渉することが絶対的な義務となった。交渉が今継続中である。皆、我々が深刻な不都合なしに、その詳細を示すことをできないことを理解するだろう。我々は、詳細を明日には公表できるよう望む。その間、我々としては、国家主権の原則が議会の迅速な会合により、護持されること、休戦の目的がこの集会の招集のためであること、この休戦の間独軍が我が要塞を占領するが、パリ城壁内に立ち入らないこと、我々が国民衛兵隊をそのまま、又軍1個師団を保持できること、我が兵の誰も領土外に連行されないことは言える。

昨27日朝9時、トロシュウ大統領は、軍務省にパリの全軍司令官を呼び寄せ、政府の各閣僚、諸高官も皆列席した。その時、パリ市城の防衛戦がすでにその目的を失い、さらには籠城の食料もなく、今やむをえず出て和平交渉をすることの凡その趣旨を述べた[98]。出席の諸将軍全員から一言の異論もなく、その会議は、数時間で終わった。このように異議が出なかったが、諸将軍は、いずれも悔しく、憤り、その心の中は、内臓が張り裂ける程で、一同はひっそりと静まり、皆その気力が抜けていた[99]。

同日、12時、ファーヴル外務大臣がビスマルク首相の書簡を入手し、こ

95 出典未確認。
96 パリは、曇。
97 27日付官報。
98 28日付le Figaro引用のle Français。
99 出典未確認。

れを市庁舎に知らせ、午後２時、普軍本陣ヴェルサイユ城に出発した。その時の同行は、ド・ボーフォール・ドプル将軍とエリソン大尉の他、書記官2名、従者１名で、革箱を携えた。外務大臣は、セイヌ河から小型蒸気船に乗り、普軍前線の河岸に着くと、この岸の上にいた普士官3名が4頭立ての馬車でこれを迎え、直ちにこれに乗り、本陣に行った。そのときは、外務大臣と将軍だけが向かい、他の士官達がこの岸の上で待機した。夕刻4時、普士官4、5名がこの岸の上に来て、仏諸士官に対面し、若干の巻煙草を出し、彼らに勧めながら、「今日から先は、友人の間柄である。我々は、決して恨みを残さない。どうか私の巻煙草をとり、吸って欲しい。我々は、今日、実に本望を果たせた。」と言った。仏士官はこれに感謝したが、その勧めに応じないで、最後まで巻煙草をとらなかったという。黄昏6時、ファーヴル外務大臣が普軍本陣を去り、帰路につき、パリに入り、直ちにトロシュウ大統領の館に行き、それから同夜9時、諸大臣各高官がこの居宅に集った。当夜の会議の事情を人に聞き、推察できないが、今日ヴェルサイユ城での応接の際、モルトケ普参謀長が出席のド・ボーフォール・ドプル将軍と和議条約を結ぶ話をしようとせず、パリ3軍の参謀長とその条約を結ぶことを求めた。そこで参謀長ド・ヴァルダン将軍が外務大臣と共に明日ヴェルサイユに行くという[100]。

今日、政府の食料局からの聞き伝えでは、市内の食料が今僅かに10日分余りを残すという[101]。

今朝、技師数人が鉄道修理のため、市内を出発した。パリの3方向の鉄道は、4日間でその修理が終わるだろうという。昨夕、技師数人が市内を出発し、電信線の修理に出たという、等[102]。

昨日来、休戦協定が成立しそうなのを見て、市内の卑しい人々や悪徳商

100 出典未確認。
101 1月28日付le Figaroは、商務省がパリ市内の軍民の食糧が9日分であると発表した旨の記事が掲載されている。
102 29日付le Temp引用のla Vérité。

人達が、高利を得ようと企み、密かに貯えていた食料、チーズ、鶏卵、鶏肉、兎肉、豚肉の類を急に市場に出し、売り払ったが、一昨日までの値段の3分の1を減らし、あるいはその半分にする者もあったという[103]。これは他でもなく、近日中に、鉄道が修理され、蒸気車が走り、他地方から食料や諸物品を市内に運送するようになれば、その貯蔵の諸物品が更に利潤がなくなることが分ったからである。悪徳商人や卑しい人々が、時の情勢をみて悪知恵を使い、その利益を企むことは、万国で共通である。

（巻の6完）

103 出典未確認。28日付le Figaroに食料品などが出回り始めた状況の記事がある。